

(国語)

「自分の考えを深め、筋道立てて表現できる児童の育成」

—「書く」質的向上のための「読む」指導の工夫—

大阪市立関目東小学校

1. 研究主題設定の理由

本校では自他の良さを認め合い、互いに尊重しようとする「豊かな心」を持ち、様々な課題に対峙したとき、最後まであきらめず粘り強く課題の解決や実現に向かって努力し「たくましく生きる」児童の育成をめざしている。

これまでの取り組みの中で、文章に書かれていることを正しく読み取る力は徐々についてきたが、自分の思いや考えを表現しようとする力が全体的に低いという課題が浮かんできた。令和3年度の大阪市小学校学力経年調査の国語科の結果では、「書くこと」の項目で平均正答率が大阪市平均より低い問題が多かった。また各クラスには、自主的に文章を書けない児童や、なぜそう思ったのか理由を考えず短い文章を書く児童が存在している。

そこで、令和4年からは研究教科を国語科とし、研究主題『自分の考えを筋道立てて表現できる児童の育成～語彙力の向上と共に～』として研究活動に取り組んできた。そして、今年度は、さらに書く内容を深めいこうと、『自分の考えを深め、筋道立てて表現できる児童の育成～「書く」質的向上のための「読む」指導の工夫』を研究主題として、研究を進めてきた。

2. 研究の趣旨

昨年度の研究成果として、順序や構成を意識した書き方が身に付き、自分の考えを少しでも書こうとする意欲の向上が見られ、令和4年度の経年調査の「書くこと」では、全学年大阪市平均より4～15%向上した。一方課題としては、文章の要旨や中心を理解し、読み取ったことを基にしたり関連付けたりして自分の考え深めて書くことが挙げられた。また、児童が主体的に考えられるような学習課題や発問など、指導の精選の重要性が再確認された。

これらのことから、昨年度に引き続き説明的文章に焦点を置き、文章から得た情報を理解し活用できるようにするために、自分の考えの根拠となる文章を「読む」指導（特に「精査・解釈」や「考えの形成」）の工夫を研究することにより、「書くこと」の内容が質的に向上すると考え、研究を進めていくこととした。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 付けたい力・言語活動の明確化と発問の工夫

- 児童らにどのような力を付けさせたいのか、児童が主体的に学ぼうとする言語活動をどうするか、目標を明確に設定することによって、より効果的な指導法の工夫を考える。
- 児童にとって価値のある言語活動を設定し、児童が主体的に学ぼうとする意欲を持続させることのできる学習計画を立てる。
- 一問一答の発問ではなく、児童が主体的に考え表現できるような発問や毎時間の学習課題を探っていく。

視点② 論理的に自分の考えを深め、表現する工夫

- 主張・根拠・理由を基に、順序良く書いたり話したりする指導を行い、論理的に分かりやすく表現する力を付けさせることを目指す。
- 根拠を探すために本文を読み取る必要性を児童に理解させ、学習に取り組ませる。
- 根拠を探し自分の考えを深めるために、どのような「読むこと」の指導の工夫ができるのかを考える。
- 主張・根拠・理由の3点は、日々の授業や話型指導の中でも問い返し、定着させる。

視点③ 書く基礎を築く指導の工夫

- 1年間継続して各学年に応じた取り組みを設定し、語彙力の向上や書くことの習慣化を図る。
- 全学年では、本校独自のセキヒガ漢字検定、6年生は日本漢字能力検定の受検や、毎時間の学習の振り返りを書くこととする。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

① 付けたい力・言語活動の明確化と発問の工夫による成果

- ・ どこに着目させて読み進めさせるのか、思考力を働かせる発問やワークシートはどうすればいいかなど、指導の焦点化ができた。
- ・ 明確な学習の目標に向かって教師が一貫した指導を行うこともでき、児童が見通しを持って学習に取り組むことができ、主体的に学習しようとする児童が増えた。
- ・ 言語活動で作成したものを、他学年に読んでもらったり、活用したりしてもらうようにした。自分の学びが他者に認められることは、自己有用感を高め、次の国語科の学習や他の学習意欲にも繋がった。

② 論理的に自分の考えを深め、表現する工夫による成果

- ・ 自ら本文を何度も読み、本文から根拠を探そうとする児童が増えた。
- ・ 主張・根拠・理由の定着により、根拠と理由を含め論理的に自分の考えを発表したり書いたりできるようになってきました。
- ・ 色線で分類したり定型文を掲示したりするなど、視覚的に見て分かる指導の工夫により、自分の考えを表現することが難しい児童が少しでも表現しようとする有効な手立てとなった。

③ 書く力の基礎を築く指導の工夫による成果

- ・ たくさんの語彙に触れ書くことを習慣化させることで、書くことに対する苦手意識が減り、書く量が増えた。これは自信にも繋がり、他の教科でも書ける文章量が増えた。

(2) 今後の課題

- グループ交流や全体交流などの考えの共有方法や指導を工夫し継続的に進めていく。
- 読むこと書くことが苦手な児童がより主体的に学ぶための工夫をさらにしていく。
- 振り返りの位置づけと、書く内容の深め方を吟味していく。